

## 早産児について

在胎週数 37 週～41 週で生まれた児を正期産といますが、それより早く生まれた児を早産といいます。早産で生まれた場合、生まれてすぐは呼吸が速く努力様であったり、哺乳が十分できなかつたりすることがあり、その場合当院では、NICU、GCU といった専門の設備で集中的な治療と看護を行うことができます。当院では 32 週以降の早産児を対象としており、急性期を乗り越えた赤ちゃんの多くは十分哺乳できるようになり、酸素なども必要なく、十分な体重と週数になって退院します。

退院後は発達や合併症の評価を外来で行います。この時期は発育が盛んなので、血液や骨を作ることが十分に追いつかないことで、貧血になりやすかったり、骨がもろくなりやすかったりすることがあるため、採血やレントゲンなどの評価を行い、そのような徴候がみられる場合は内服薬治療を行います。ほとんどは一時的な治療で、十分な発達を確認して外来受診を終了します。

また、35 週以下で出生した児は、RS ウィルスというウィルス（風邪の原因となる代表的なウィルス）に感染した場合、肺炎などの呼吸器の重症感染症を起こすリスクが高く、それを予防するために、シナジスというお薬の注射を行うことができます。

早産となるケースのほとんどは、予定より早い出産の場面が突然生じるため、ご家族は不安や心配を抱えていることが多いかと思われます。赤ちゃんも一人一人抱える問題点は異なりますので、赤ちゃんにご家族に寄り添った医療を提供できるように常に心がけていきたいと考えています。